



## 故 佐 々 木 忠 義 教 授

### 略 歴

明治43年 5月	広島県に生まれる		メートルの潜水記録を達成した
昭和10年 3月	東京物理学校卒業	43年	海洋科学技術審議会委員
16年 3月	北海道帝国大学理学部物理学科卒業	45年 9月	第1回国際海洋開発企画委員長
16年 4月	京城帝国大学予科講師	46年 3月	理化学研究所退任
8月	京城帝国大学予科教授	4月	理化学研究所名誉研究員
19年	理化学研究所員（仁科研究室）	47年10月	第2回国際海洋開発会議・展示会組織委員会副委員長
24年10月	北海道大学より理学博士	48年10月	日本海洋学会沿岸海洋研究部会長
	戦後の産業振興に寄与した功績により	11月	東京水産大学長（2期6年間）
	発明協会より表彰さる	12月	フランス国よりレジョン・ドヌール・シュバリエ勲章を授与される
28年 7月	東京水産大学教授	48年から	学長として教育研究体制の再編成に着手し、4学科を7学科とし、大学院修士課程の3専攻を5専攻に拡充
	理化学研究所主任研究員（海洋物理研究室）	50年 8月	第3回国際海洋開発会議・展示会組織委員会副委員長
31年	文部省在外研究員として渡仏（パリ大学海洋研究所）	9月	海洋開発審議会委員
33年	フランスのバチスカーフ FNRS 3号	51年 9月	第4回国際海洋開発会議・展示会組織委員会副委員長
	来日の交渉を行ない、ウォー艇長とともに日本海溝を調査、3,100メートル潜水して日本の深海研究の幕あけをした	54年11月	東京水産大学長任期満了により退官日中海洋・水産科学技術交流協会を創立し、会長となる
35年 4月	日仏海洋学会を創立し、会長となる	12月	東京水産大学名誉教授
37年 5月	日本海洋学会沿岸海洋研究部会事業部長	56年11月	勲二等旭日重光章を授与される
	フランスのアルキメデス号来日のさい	58年11月	正三位に叙せられる
	オバーン副艇長ドロズ氏とともに日本海溝で深海潜水研究を行ない、1万		

## 佐々木忠義博士の御逝去を悼む

日本海洋学会沿岸海洋研究部会長佐々木忠義先生は、昭和58年10月11日午後5時、食道シュヨウのため東京都豊島区の癌研究会付属病院で逝去されました。齢73才。まことに痛恨の至りで、ここに皆さんとともに謹んでご冥福をお祈りいたしたいと存じます。

さる9月23日、岩下光男先生とご一緒に上記病院に佐々木先生をお見舞いいたしました。先生は「もうガンは治った。後は体力を回復するだけだ。……沿岸海洋研究部会と中国山東海洋学院一行歓迎の件よろしく願います」と言われ、先生は病床から起き上がり、私共としっかり握手をかわされました。しかし、これが先生との最後の交された言葉になろうとは夢想だにできなかったことであります。

先生は海洋物理学者として、海洋光学・深海調査・計測機器・海洋調査の第1線で永らく活躍されました。これらに関する論文として、指向性集魚灯に関する実験的研究・水中における昼光の角度分布測定と装置について等、海洋光学に関するもの29篇、潜水球“くろしお”、バチスカーフによる深海研究、深海底層流に関する研究、深海水中の懸濁物について等、深海調査に関するもの14篇、連続自記水温計と深度計・海中カメラ・海中テレビジョン・海中濁度計・深層流測定用中立浮子について、海洋投棄用放射性廃棄物容器に関する研究等、計測機器に関するもの28篇、DSLと水温および水中照度の関係、海水中の懸濁物について、X線回折による海水中の無機懸濁物の研究等、海洋調査に関するもの14篇があります。なお、上記の研究業績はほとんど大部分が、理化学研究所海洋物理研究室において、同研究室員の方々の協力によりなされたものであります。

他方先生はわが国の海洋政策の基幹となった海洋科学技術審議会および海洋開発審議会の委員として活動するとともに、わが国における海洋科学技術の向上と海洋開発産業の振興に貢献されました。昭和45年9月、国際海洋科学協会第15回総会並びに世界合同海洋会議が東京で開かれた機会に、自ら企画委員長として第1回国際海洋開発の開催に情熱を傾けられました。昭和47年10月には第2回国際海洋開発会議と海洋開発が開かれ、組織委員会副委員長として活躍されました。昭和50年8月には沖縄の国際海洋博覧会の開催を機に、東京で第3回国際海洋開発会議が開かれ、また翌51年には第4回国際海洋開発会議と開発が開かれました。これら一連の国際会議と展示会で多くの内外の学者が参集し、多くの論文

が発表され、また多くの内外の新しい海洋開発機器が展示され、わが国の海洋開発技術を国際レベルに発展させたご功績はまことに大きいものがあります。

また先生はとくに深海調査、海洋開発に情熱を傾けられ、多くの訳本や編著書があり、海は生きている（沈黙の世界）J. Y. クスター（訳）をはじめ他に訳本4冊、深海の秘境（著）、海洋開発（編）をはじめ、他に編著書7冊（内シリーズ2組）があります。

前述の各分野の研究成果をふまえて、先生は水産大学における大学院生、専攻科学生、学部学生の指導育成に情熱を傾け、数多くの人材を育成されたのであります。特に略歴に示すように学科、専攻の増設の際、海洋環境工学科のように工学系を導入されたことは、海洋開発には欠かせない分野で、先生の夢の一部が達せられたものと推察されます。

また先生は“沿岸海洋”にも非常に興味をもたれ、速水頌一郎先生に対する佐々木先生の追悼文に詳しく述べられているように沿岸海洋研究部会の発足から参画されました。昭和37年5月当部会が発足と同時に事業部長となられ、毎年2回のシンポジウムを開いて今日に至っております。昭和48年10月から速水先生の後を継いで部長となられ、毎年2回のシンポジウム開催の際は必ず開会の挨拶をされ、学問に対する深い造詣と優れた見識は私共部会員に深い感銘を与えたのであります。

昭和57年4月6日の気象庁における当部会委員会で、創立20周年記念事業の一つとして、日本全国沿岸海洋誌の編集（委員長国司秀明教授）が承認され、目下準備中ですが、先生にはことの外力を入れられ資金源の工面をご考慮中、お亡くなりになり、さぞかし心残りをされたことと拝察されます。

さらに先生は海外との学术交流に力を入れられ、日仏間の学术交流をはじめ、日中海洋・水産科学技術交流協会を作られました。そして先生の永年の御努力が実り、昨秋中華人民共和国山東海洋学院の海洋調査船「東方紅」号が訪日いたしました。しかし先生は「東方紅」が東京港入港直前に亡くなられ、まことに痛恨の念に堪えません。「東方紅」はその後東京から11月17日清水港に入港し、同日夕刻三保会館で調査団60名、東方紅50名の大歓迎パーティが開かれ、席上東海大学側を加え総勢170名の参加者一同が黙祷を捧げ、先生のご功績を称え且つ先生のご冥福をお祈りいたしました。どうぞ先生安らかに眠り下さい。（沿岸海洋研究部会 事業部長 淵 秀隆）